

青海湖のカワウ

張同作・李広英

訳 福井和二

ウはきわめて広範囲に分布している水鳥である。南極と北極を除く多くの国、地域で彼の姿を見ることができる。世界全体でウは32種あり、そのうち我が国には5種、カワウ、ウミウ、ヒメウ、チシマウガラスとアジアコビトウが生息しており、そのうち最もよく見かけるのはカワウで、長江南北の多くの湖沼、湿地湖沼などの水系に多い。青海湖の鳥島は“高原の真珠” 贖えられる鳥類の楽園で、毎年夏になると数万といわれる各種の鳥類が生息し、内外に知られた鳥類保護区である。ここで、水を友としているカワウは、減少することのない常連客である。筆者は1999年と2000年に青海湖で観察を行い、期間中少なからず人と関わりのあるカワウの知られざる生態習性を二三摘録する。

漁の名手

カワウは魚を食べる、したがって、人々は“魚鷹ユイイン”、“魚老鴉ユイラオグア”と呼ぶこともある。カワウは好んで水遊びをし、岸辺で休息している。多くの時間、彼らは岸辺で寝ているように見えるが、その実、双方の黒目はらんらんと見開いて、湖面を監視しており、一旦、水面下の獲物を発見したならば、すぐに飛び立って沖の水面に向かい、必ず空振りをしない。しかし、地上での行動は不器用で、風采があがらない。彼らは一流の潜水夫で、漁の名手である。彼らは1~2 m潜水(最も深くは10m)し、30~40秒(最長70秒)魚を追いかけるといわれ、漁はお手のものといえる。もし、一羽のカワウが一匹の大魚を捕らえることができなくとも、彼は格闘しながら、手助けを求めて同僚に声をかける。附近のカワウはこれを聞いて、すぐさま応援に駆けつけ、一緒に大魚に向かって攻撃する。人類社会で認められてきた集団の力の偉大さは自然界も同様である。

高所での遭難

カワウは通常断崖絶壁の凹みに営巣し、便利な両足の鋭い爪を頼りによじ登る。しかしながら、断崖は安全であると同時に危険でもある。カワウは繁殖活動の一切、たとえば、交尾、産卵、育雛など、自然とはいえ全て、これらの環境の中で完成する。彼らは生まれながらに鋭い爪と長く広い翼を持っているから、断崖絶壁はカワウの成鳥に対してほとんど障害にならない。だから、険阻な断崖で生まれたばかりのひよわな雛のこの時期は、すべて危険にさらされている。生まれたばかりの雛はある期間、巣の中でおとなしくしており、また、彼らはこの時期、立つことも、歩くことも出来ない。彼らが少しづつ成長した後、巣の中でじっとしておれなくなり、たまたま大胆な冒険者が巣を飛び出し、足場を失い、崖下に落ちて、運悪くあの世行きとなる。運よく生き残っても、彼らは崖の上にある巣まで這い上がることは出来ず、最後には寒さと飢え死か、あるいは他の動物の餌となる。悪天候もまた、彼らにとって命取りの出来事である。大荒れの嵐の後、哀れな小さな命がこの世を離れていく、その数は少なくない。命というものはこのように脆いものである。しかしながら、正常な状態ではいずれ幸運な生活が訪れ、何事もなく生活していくことになる。

むごい父母

普通の状況ではカワウの両親は比較的責任感が強く、いつまでも面倒をみる。彼らは雌雄が一

緒になって抱卵し、共同で雛の養育にあたる。天敵が近づいたなら彼らは頭を挙げ、胸を突き出し、頸を伸ばして振りながら、命をかけて家を守るような格好をする。しかし、人々には理解が出来ない、時にはカワウは子どもたちに向かって思いきった、残酷なことをする。我々の分析によるとカワウの“子殺し”行為は、①続く悪天候による雛の病気、あるいは栄養不良。②親鳥の養育能力の差、雛に餌を与える力が足りない親の場合。③両親のどちらかが死ぬか、逃げ出し、養育に参加しなくなった場合。④子育て中の巣に人為的干渉があった場合。など多くのことが原因と考えられる。しかし、結局何が主な原因であるかは今後さらに研究されなければならない。

自由な旅行者

カワウは青海湖地区においては夏鳥で、毎年3月中下旬に渡来し、10月上中旬に去る、なぜ、千万という多数のカワウが空を覆い日を遮るほどこの場所に来るのか？ この問題に答えるため、通常用いられる方法は鳥類標識調査である。

1999年我々は青海湖国家級自然保護区海心山のカワウの雛に対して大規模な標識調査を行ない、2000年我々はインドから3通の回収報告を受けた。これにより、我々は青海湖のカワウの渡りの概要を見ることが出来た。青海湖を出発したカワウは青海・チベット高原の東北部を経てヒマラヤ山脈を越えて、インドの低海拔地帯へ渡っていた。青海湖のカワウは判で押したように、毎年‘秋帰春来’の歴史を繰り返しており、そのため人は彼らのことを“旅券不要の自由旅行者”だと言っている。